



混浴ハーレム生徒会

～恋と選挙と温泉旅行と～

伊吹泰郎

挿絵/猫丸

立ち読み版



目次

Contents

プロローグ	……	4
第一章	「明後日に備えて、貸切風呂の予行演習もしたいんです」	16
第二章	「馬鹿っ！ 翔一君の馬鹿っ！」	69
第三章	「賞品は翔一君を今夜好き勝手にする権利」	127
第四章	「私と遠野さんに、ご奉仕させてほしいの……っ」	183
第五章	「さて、身体を張ったアピールといきますか」	243
エピローグ	……	281

登場人物

Characters

望月 翔一

(もちづき しょういち)

竜ヶ園学院の生徒会副会長。控えめな性格だが、親切で心優しい少年。

柚木 茜

(ゆずき あかね)

勝ち気で負けず嫌いな生徒会長。凛とした雰囲気ですべてを引っ張るしっかり者。密かに気になっている翔一を生徒会へ勧誘した。

遠野 いずみ

(とおの)

書記兼会計の美少女。一年生ながらも頭がよく、能力は高い。翔一に好意を寄せていて、甘えたりからかったりと小悪魔的な振る舞いをする。

桧山 冴子

(ひやま さえこ)

九月に引退した元生徒会長。朗らかな性格で男女問わず人気が高い。突拍子もない思いつきで周囲を振り回すことも。



彼は尚も勝手に動きそうな手を、引っこ抜くような勢いで秘所から遠ざけた。その先端を濡らす愛液が、飛沫となって布団に散る。

「ひはっ……!!? あ……あっ……はっ……しょ……お……翔一……君っ……?」

呼吸を細切れにしたまま、茜が見上げてきた。もつとも、そこには安心よりも困惑が色濃い。絶頂手前で解放されるなど、彼女も思っていないのだから。投げ出した手足からも力を抜かず、断続的に痙攣させている。割れ目は蕩けきって、湯気まで上らせそうだ。

「あ、あのっ……柚木さんっ、俺っ……俺っ……!」

言葉を探す翔一。だが、恋人関係にすらなっていない今、気取った言い回しなど嘘にしかならない。結局、自分は誠意でなく性欲をぶつけるだけなのだ。

「俺、柚木さんを抱きたいっ……! 柚木さんをもっと気持ち良くして……俺も一緒に気持ち良くなりたい!」

「……っ!」

茜が手足を一層竦ませた。そこで自分がどんな姿勢かを思い出したらしく、太腿を重ねて膝も曲げる。

「翔一君……ずるい……」

ポツリと恨み言めいた言葉。

「……………」

「ここまでしておいて、その後で言うなんて……断れるわけじゃない……っ……あの、でも、一つお願いっ……」

決心した彼女は、頼みごとを口にする。それは奇しくも、事後のいずみが言ったのと似た内容だった。

「だ、抱いてる時は……私のことを名前で呼んで……っ」

「あ……」

翔一は不思議なぐらい胸が高鳴った。それを抑えて唾を飲む。口の中を湿らせる。

「茜、さんっ……」

一音ずつはつきり声にすれば、茜は反芻するように目を閉じた。それから息を吐いて、脚を肩幅まで開き直す。

「翔一君……来て……っ」

「うんっ！」

翔一は意気込んで頷き、ベルトのバックル、さらにズボンのホックを外していった。もつとも、腰周りの布を下げようとして、ズボンを脱ぐには手こずりそうだと気付

く。自分も汗をかいて、生地が脚に張り付くようになっていたのだ。

少し迷った末、少年はズボンをそのまま、ペニスを出すのを優先してトランクスを引き下ろした。

すでに陰茎はそそり立ち、亀頭は丸く膨らんでいる。外へ出るなり、戒めを振り払うような逞しきで天井をふり仰いだ。ピクンピクンと揺れる姿も、牡剥き出しで浅ましい。

それから翔一は茜の太腿を掴んだ。せつかく彼女が開いてくれた脚だが、今のままでは間へ腰を置くことができない。

「ごめん……もっと開くね……」

謝りつつ、ハレンチな大股開きをさせた。茜も抵抗しない。そうやって作ったスペースへ跪き、少年は杭のような怒張を右手で握って角度を下向きに変えた。

「んっ……」

鈍い疼きが竿の根元に集まる。しかも我慢汁は玉袋の方まで垂れて、ツルリと掌を滑らせそうだ。そうならないよう、ゆっくり秘所へ、切っ先の位置を合わせていく。

「う……うう……」

亀頭が大事な場所へ触れても、茜はシートを握って耐え続けていた。

「んっ！」

むしろ、責める翔一の方が声が漏らしてしまふ。滾った粘膜にとつては、軽い接触さえも疼きの源。まして女芯は火が点いたように熱くなっているのだ。

「は……ふ、うう、う……っ」

前哨戦めいた快感に耐えながら、翔一は肉棒を上下させた。さつき指で弄って、奥へ通じる道の場所は掴んだつもりだ。

その狙いは概ね当たりで、程なくグプツと深みへ沈む感覚が。

ここだ、間違いない。

「い、いくよ、茜さんっ！」

少女に予告。目も口も閉ざした彼女がコクンと頷くのを確認してから、肉穴へペニスを潜り込ませ始めた。

「ふ、ぐっ！」

膣口は元から小さいのを、さらに緊張で縮こまらせている。翔一が腰を押し出せば、力負けしてジワジワ開いていくものの、決してすんなりとは通してくれず、我慢汁をこそぎ取らんばかりに、鈴口周りを舐めてきた。

「は……お……ああっ！」

翔一は下半身が勝手に動きだしそうな快感に、抗わなければならなかった。無理強いはできない。いくら欲望を押し付けるセックスとはいえ、痛い思いなんてさせたくない。

「は……ふっ！」

喘ぎながら緩慢な動きを続けるうち、行く手をゴムのような薄い壁に遮られた。

（これ、茜さんの処女膜だ……！）

翔一は中途半端な姿勢で停止。一旦息を整えてから、改めて腰を押し出した。

プツン。生娘の証は瞬時に破れて、さらなる道が開かれる。だが窮屈なのは変わらなかった。男根は押し戻されそうで、それをかき分けると、今度は抜けた先で牡粘膜をギユウギユウ搾られる。

たつた数ミリ進む間の摩擦でさえ、ひたすら強烈だった。内に籠もる官能の熱も、突沸さながらに精液を打ち上げさせかねないほどだ。

下では茜が美貌を苦悶にしかめていた。

「はっ……あっ……きはっ……や……あ……っ……い、いた……ううっ！」

珠の汗も数を増やして、まるで熱病にかかったようだった。閉じられた臉の端では、汗に混じって涙も光る。

翔一は唇を噛んだ。あれだけ前戯をして、挿入を慎重にしても、破瓜の痛みを中和するには足りなかった。

亀頭を埋めたところで、動きを止める彼。しかし疼きの方には休みがなくて、亀頭を焼き続ける。

その時、茜が目を開いた。汗みずくの頬に笑みを浮かべて見せた。

「わ、私……平気だから……っ……翔一君の好きなように……来て……っ」

「茜さん……痛いでしょ!!」

「でも、翔一君と一つになれた証拠だものっ……痛いのも、幸せなの……!」

一途な返事に、身体中の血が滾った。

「ゆず……う……あ、茜、さんっ!」

翔一は動きを再開させて、何度も休みを挟みながら、小刻みに進んだ。まず半センチぐらい、それからまた半センチ。その都度、神経の露わになりそうな疼きが肉棒の内外で荒れ狂い、高熱の沼で溺れる心地へ叩き込まれる。

「ひぐ……ううっ! 翔一……君……っ! す、好き……いつ!」

茜も苦しげな息の下、手足を竦ませ、愛の言葉を頼りに耐えていた。

そしてどうにか、鈴口は子宮口の弾力まで到達する。

「ふっ……うっ！」

いつの間にか止まっていた息を、翔一は短く吐き出した。途端に子種が肉棒の奥でざわつき、慌てて竿を締め直す。

油断大敵。しかも外へ出る糸口を掴んでしまった子種は、簡単には落ち着いてくれない。少年の尿道を苛んできた。

「くっ、んあうううっ！」

射精間際の焦りは、悪魔の誘惑さながらだ。切羽詰まって、毛が逆立つようで、それだけでも気持ちいいのに、もし言いなりになれば、極上の法悦が待っている。

何秒間も逆らい続けた末、やっと射精感は和らいだ。

「ふっ……ううっ！」

翔一はまた一呼吸。そうして汗で湿った両手を、握ったり開いたり。指を充分に解し、汗も自分の腿で拭いたら、張りつめた茜の両乳房を鷺掴みした。

「ひうっ!!」

茜は声を裏返らせ、一緒に秘洞もきつくなった。

あたかも押しではいけないスイッチを押してしまったみたいだ。少年は射精を堪えようと、またも尻肉を引き締める羽目になった。

「ふっ……ふうううっ……!!」

数秒間にわたる苦闘の末、精液の気配が薄れたら、細く長い呼吸。そして菌を食いしぼる。

いずみとした時も、後から快感の方を大きく出来たのだ。

翔一は前向きに考えることにして、茜へ囁きかけた。

「しばらく……俺に任せてっ……」

「……ど、どうするの……?」

「うん、胸を弄れば……茜さんが痛いのも減らせるって思うんだ……」

小声で答えつつ、さつき彼女を悶えさせたやり方で、翔一は膨らみを揺さぶった。さらに十指をバラバラに波打たせてもみる。最初はぎこちなかったものの、だんだん愛撫は滑らかになっていく。

「ん……茜さんの胸……柔らかい……」

「やだあつ……へ、変なことっ……言わないで……えっ」

相手を思いやる必要があるこんな時でさえ、美乳の感触は心を奪われそうなほど魅力的だった。汗で潤っていると、肌のきめ細かさも一層強調される。

とはいえ、弾力を愉しむ指遣いだって、茜を刺激できるのだ。次々と切り替わる愛

撫に、たわみ続ける柔肉。少女の声も、苦しさと甘さの混在する複雑な音色を帯び始めた。

「はっ……やあん……くっ、うああっ……ひぐっ、あっ……翔一、くうん……！」

勢いづいた翔一は乳首も摘んでみる。

「んあうっ!!」

のけ反る茜の後頭部が、シーツへ沈んだ。当然のように秘洞もすぼまる。しかし、ペニスも揉まれることに慣れてきて、抜き差ししななければ、もうしばらく持ちこたえられそうだ。

少年は自分のもらった快感を茜へ返すように、ねちっこい指遣いへのめり込む。

「んっ、あっ！ むっ、胸がっ！ んあっ……変……なのおっ……！ やううん！」
時間をかけて指を操り続ければ、突起を短く扱かれた瞬間、喘ぎが特に大きくなる
と分かった。

となれば、徹底的にやるのみだ。搾乳しながら、ピンクの突起を苛めまくる。もちろん白い液体は噴き出さないが、代わりにあられもない反応を引き出せた。

「翔一君っ！ 駄目っ、駄目ええっ！ そ、そんな風にされたらっ……あああっ！」
言葉と反対に悶えてしまう茜。どうやら破瓜の痛みや見られる恥ずかしさには耐え

られても、思考を蝕む快樂には弱いらしい。そこがある意味、優等生らしい。

うねる身体に押された乳房は、斜めに浮きながらも、掌に圧されて潰れてしまう。

「……どうなっちゃいそうなのっ……!! 教えてっ、茜さん!」

翔一も頭に血が昇っていた。少女が言いたくないというように首を振っても、諦めずに言葉と指で催促をする。

「恥ずかしがらないでっ……茜さんがどうなるか、俺知りたいよ!」

乳首を捻り回し、さらに芽生えた疼きを髓へ閉じ込めるようにギョツと摘み上げ。彼のしつこさに、茜も音を上げた。

「じ、ビリビリしたのがっ……胸から取れなくなっちゃうのお……っ! だからっ……もおやめてええっ!」

だが、こんな可愛い答えは牡を鼓舞するだけだ。

「ううん、止めたくないっ……茜さんが感じるならもつとやらせて!」

翔一はバストが縦に伸びるほど強く引つ張り上げた。

「うああ! やあああっ!」

茜の悲鳴がまた一オクターブ高くなる。

さらに肉壁まで盛大にのたうった。硬い剛直さえ消化しそうなほどの、熱と圧力だ。

「つあおおふ!!」

さつきは辛うじて持ちこたえられると思っていたが、こんなにきつくなったら、気を抜くと同時に昇天してしまう。

とはいえ彼を追いつめたのは、膣の締めりだけではなかった。褌がさつきより柔軟になっているのだ。ひたすらしゃちほこばるのみだった牝肉の群れは、ペニスの味を知りたくなつたように、粘膜や皮をおずおず撫で始めている。

「っ……あっ!」

危うい状態になつてしまつたが、あと一押しで残つた痛みも打ち消せるかもしれない。

その一押しを少年は閃いた。結合部近くには、乳首よりも快感に弱い突起がある。翔一は右手の狙いをそこへ変更。予告もなしに転がしてみた。

「いひうううっ!!」

まるで甘美な蜜と毒を一度に注ぎ込まれたような、茜の反応だった。

「うくっ!!」

濡れ褌の猛攻で酩酊状態になりながらも、翔一は乳首鬨りを超える手応えを感じていた。

「茜さんっ、いいっ！ いいよおっ！ 気持ちいいしっ、あぐっ、茜さんっ、すご
っ、すごくすごくすごくエッチだ……あ！」

「いやああ！ 言わないでええええ！」

茜はしゃくり上げながら訴える。さらにもがく動きで、ズッポリ嵌った肉竿をあら
ぬ方へ振り回す。その摩擦が彼女自身を追いつめた。

「ひはああんっ！」

華奢な腰も、波打つのを止められなくなってきた。

「いやっ、変なおおっ！ いっ、痛いはずなのにい！ んふはっ、あああっ！ な
んで私の身体っ、こんなっ……熱くなっちゃうのおっ!!」

初心な茜に、未知の快楽は拷問同然。彼女の狼狽えぶりに、翔一はサディステイッ
クな興奮を呼び起こされた。

「茜さんっ、もっと感じてっ……茜さん、茜さんっ！」

尊敬する少女のクリトリスを、欲望全開で廻り回す。左手では乳房をとことん玩弄
した。いつそ、もう一本手が欲しい。そうすれば、もっとな彼女を愛撫できるのに。

「く……あっ！」

今こそ腰を使うべきかもしれない。もはや自分が絶頂間近だろうと構わない。

「茜さんっ、俺っ、動いてみるからっ……痛かったら教えてっ！」

「えっ!? やっ……嘘っ、待つて! お願いつ、中からされるなんてっ……私っ、おかしくなっちやうからああっ!」

茜は必死に頼んでくるが、媚肉は誘うようにのたくっている。

翔一は念のために手を休めて、腰を引く動きもゆつくりにした。大きなカリ首だと、牝褻を熊手のように引つかいてしまうのだ。やはりここは慎重に――。

「んふあああっ!」

扶られた茜に苦しみの気配はなかった。翔一は己の直感に従って、もう少しだけペースを上げる。

「や……あっ……ふううんっ、くうああはっ!」

思った通り、ますます甘くなる喘ぎ声。愛撫はちゃんと成果を上げていたのだ。

猛る翔一は一思いに膣内を開拓したくなった。だが、ジツとしていてさえ崖っぶちの状態だった。ペニスへも、猛烈な刺激が殺到している。

龟头は張り出す傘を捲れんばかりにねぶり返されて、表面の丸みもなぞられていた。竿だつて逆撫でされる。とにかく剛直全体に張り巡らされた神経が、一斉につま弾かれたかのように痺れてしまった。



そう言って女性らしからぬ腕力で、少年を引つ張り始める冴子。

立ち去り際には、茜といわずみへ軽くウイंकを投げかけた。

「奪い返したかったら、じ、つ、りよ、く、でかかってきなさい」

「あ……」「翔一く……ん」

実力という単語が効いてか、翔一を見送るはずみ達はひどく心細そうだった。

(……松山先輩、何を考えてるんだろう?)

十五分後、男湯の湯船に浸かりながら、翔一は困惑で顔を曇らせていた。

——このあたしとデートするんだから、身体は綺麗にしないとね——

などと、大浴場へ行くよう指示されたのだ。

(温まった後で外へ出るんじゃ、湯冷めしちゃうし……ホテルの中のカラオケに行くつもりとか?)

もしセクハラ系の何かを企んでいるなら、貸切風呂へ入ろうと言いだしただろう。それなら本気で止めなければならなかった。

(うん……貞操は大丈夫とか言ってたもんね……)

ここで悩んでいても答えは出ない。翔一は湯を散らして洗い場へ上がった。他に客

はいないので、タオルで陰部を隠す必要もなく、そのままシャワー前のバスチェアに座る。

ホテル名月の大浴場は、十人以上がゆったり使える広さだった。湯船は幾つもの丸く磨かれた岩で囲まれ、洗い場の床にも平たい岩が並んでいる。

シャワーは壁際に並び、その下の蛇口は、スイッチで一定量の湯が出るタイプだ。温泉情緒を満喫できる造りだが、照明は落とし気味だし、湯気の量も多いので、翔一の裸眼だと隅の方は少しぼやけてしまった。

やがて湯が桶に溜まったところで、脱衣所と通じるガラス戸の開く音がした。他の客も来たらしい。翔一は何気なくそつちへ目を向け、

(いっ!!)

足を滑らせそうになる。

「翔一君ったら長湯しすぎじゃない？ お姉さん、待ちくたびれて来ちゃったわよ」
そこに冴子がいた。

一応、タオルを前へ垂らしているが、その程度では豊かなボディラインを隠せない。眼鏡なしの翔一でさえ、肌が半分近く見えていると分かった。

乳房は大きく、あたかもバレーボールが並んでいるかのようだ。ただし表面はポー

ルと違って、生クリームのように柔らかかそう。その下でウエストがたおやかに括れ、ヒップまでいくとまたむっちりした膨らみぶりに戻る。

「あららあ？」

冴子の残酷な笑顔は、金縛りになった翔一の下半分へ向けられた。

「あっ!？」

翔一も慌ててタオルで股間を隠す。

若い肉棒は一瞬のうちに亀頭を膨らませ、太く元気に上向いていたのだ。

「は、早く出てくださいっ！ 人が来たら大変ですよ！」

だが、冴子は平然と歩み寄ってくる。タオルも美脚に押されてユラユラ揺れた。生地が湿って陰毛を透けさせそうだ。

しかも翔一にとって、秘所と顔は近い高さにあるのだ。

手を伸ばせば触れられるところまで冴子が来てしまうと、少年はもうそちらを見られなかった。

そんな常識的な反応を、冴子は豪快に笑い飛ばす。

「平気平気。今日は平日でお客様さん少ないもの。それにあたしつてば髪が短いから、誰か来ても、お湯に飛び込んでごまかせるんじゃない？」

「そんなはずないでしょっ！」

「じゃあ翔一君は、あたしの身体のどこでばれちゃうと思うわけ？」

「うっ……！」

わざわざ聞いてくるのが腹黒い。翔一は尚も頬が熱くなった。その顔を、冴子は床にしやがんで覗き込んでくる。

「純情ぶっててもしょうがないじゃない。いずみちゃんと茜ちゃんをモノにした上、あたしにまで発情しちゃうくせに」

「だ、だけど……俺っ！」

猛獣を思わせる、美しくも迫力のある瞳が、言い訳しそうな少年を射抜いた。そしてニヤリと一言。

「無節操」

「っ……俺は……俺は……！」

言い返したくても言葉が出てこない。しばらく口をパクつかせた拳句、行き場を探していた翔一の感情は、ついに爆発した。

「そうですよっ！ 俺、いずみさんも茜さんも好きな無節操男です！ ちゃんと答えを出さなきゃって分かっているのに、一人のどちらかが離れていくと思うと怖いんで

す！」

叫びながら、自己嫌悪が募る。

しかし、何故か冴子は急に優しい表情を見せた。

「うん、それを聞いて安心した。元々人のいい翔一君じゃ、いずみちゃん達の一途さを払いのけるのは無理だったと思うもの。裸の付き合いつていいわよねえ。ちゃんと生の気持ちを教えてもらえる」

「あ……安心って？」

どんな罪も許してくれそうな口ぶりに、翔一はすがりつきたくなる。けれど、そこまで情けない人間になつてしまつては――。

と、彼の無駄なこだわりを粉碎するように、冴子がいきなり頭を抱きしめてきた。腕を伸ばし、タオルを躊躇なく身体から離し、巨乳も二つ丸見えにして。

出てきたバストはボリウム満点で、下端に半円形の黒い影を作っていた。重そうながらもふつくら柔らかかそうな外見には、パワフルさと包容力の両方が表れている。一方で桃色の乳輪は、湯気のように淡く、乳首も控えめだった。

とはいえ、それらは翔一が一秒も経たないうちに感じたこと。次の瞬間には、顔面へ柔肉を押し付けられていた。

「んっ……ぐっ!!」

肌はまるで型取りするようにたわんで、鼻や口へみっちりかぶさってくる。滑らかで、温かくて、弾力も溢れんばかりだから、顔をぐいぐい押し返してもくる。

翔一は驚き、それ以上に苦しさを覚えた。だが、息を飲むなり脳内を侵したのは、蠱惑的な女性の匂いだ。子供さながらに安心してしまいそうな、それでいて牡の本能も呼び起こされそうな。

「あたしが翔一君を手伝ってあげる。名案があるのよ」

「でも、こういうことって自分で答えを出さなきゃ……!」

僅かに冴子の力が緩んだところで、少年は顔を上げた。

「一生懸命悩むのもいいことだと思おうわ」

慈愛の眼差しで冴子。髪を撫でてくれる手つきも優しかった。

「だけど優先すべきは、いずみちゃんと茜ちゃんを待たせないことじゃない? あたしはその方法を思いついてる。どうしようもない時に人を頼るのだから、立派な手段よ?」

「あ……」

「正直でワガママな翔一君、あたしは好きよ。悪いようにはしないから……任せて?」

「桧山先輩……」

迷いも、見栄も、全部剥ぎ取られて、翔一は小さく頷いた。そこで冴子が半歩ほど下がり、笑みを底知れないものに戻す。

「では、解決策のステップ一。あたしとエッチしましょ？」

「う、え!!」

バスケアごと飛び退いてしまう少年。

「どういうことですか、それっ!!」

「だからね、それも作戦の一部なの。強情張るのはなしよ？ おちんちん、こんなにしちやってるんだもの」

冴子が右手をペニスへ伸ばす。タオルの下へ器用に滑り込ませた掌と指で、素早く亀頭をさすってきた。

「ふっ、あっ!!」

無造作に思える動き方なのに、握る力が絶妙。翔一には理解不能なテクニクで、牡粘膜へ絶大な痺れを送り込む。神経という神経が張りつめた陰茎は、飛び跳ねるように最大サイズまで膨張してしまった。

「や、やめてください……先輩!」

翔一は相手の肩を押すが、彼女は身体を揺らして、力を受け流してしまふ。

「ほらほら、すっかり敏感になつてるじゃない」

余裕たっぷり、言葉責めを交えながら、さらに亀頭とエラを揉み解した。手つきと合わせて、ペニスの快感も強くなつたり弱くなつたり。

「う……あっ!! 人が来るかもしれないですよ……!!」

「見られるかもしれないスリルつて結構いいものよ? 翔一君もクセになつちやうかも」

冴子は心底楽しそう。色々な表情を見せた末、出てきたのはいつも通り愉快犯の顔だ。

「俺っ……もう外へ出ます」

「逃げるなら、人を呼んじゃおうかしら?」

「いっ!!」

翔一はギクリと止まった。

「松山先輩……さつきは貞操なら大丈夫とか言つてたじゃないですか……」

「貞操って純潔を守ることでしょ? 翔一君、もう二股かけちゃつてるじゃない。それとステップ一の補足。これからは先輩なんて他人行儀な言い方はやめて、冴子さん

って呼びなさい」

すでに主導権は冴子に握られていた。

彼女から「ほら、脚動かして」と両膝に手を置かれ、翔一は腿を広げてしまう。そうして出来た隙間に冴子は膝をつき、タオルもどけて、怒張をマジマジ見つめてきた。「翔一君ってば可愛い顔なのに、めちやくちや遅しいおちんちんね。……突然変異でも起こしちゃったんじゃない？」

「い……言わないでください！」

恥ずかしさに翔一が打ち震えると、冴子は二つの乳房を手ですくい上げた。深い谷間を広げつつ、そそり立ったペニスへ寄せてくる。

「翔一君はパイズリって知ってる……？」

「え……っ」

内容ぐらいなら知っていた。しかし、答えも言わないうちに、彼の肉棒は柔肉に迎え入れられてしまう。すかさず両脇から力が加わり、竿の部分をキュッと挟んできた。「ふっ、くあっ!!」

乳房は縦に潰れて、陰毛の生え際からカリ首へ至るまで、ぴったり形を合わせる。触れる部分は等しく圧迫し、もはや取りこぼしたのは亀頭だけだ。直後、力が上端へ

片寄り、エラを重点的に揉んできた。

「は、ああっ！ 先輩!!」

張り出す傘の部分が、乳房と一緒にひしゃげてしまう。愉悦もそこにかき集められて、翔一は後ろへのけ反りかけた。

「くっ……あっ!!」

倒れまいと踏ん張り、腰の筋肉も軋ませると、上体が振り子のように前へ傾く。自然と冴子の裸身を抱え込む格好になった。

「呼び方は『冴子さん』でしょ？」

可笑しそう訂正しつつ、力を下へずらす冴子。今度は竿の表面が伸ばされる。代わりにカリ首への責めは緩められ、快感ともどかしさがまとめて責め寄せてきた。

「さ、冴子……さんっ！」

「んふっ、素直でよろしいっ」

ご褒美とばかり、またもカリ首が締められる。今度はさつきよりきつい。と思いきや、またも快感は竿へ移された。

「あ……!?!」

「我慢、我慢。ひたすら押しまくるより、時には引いた方が後で気持ち良くなるんだ

から」

冴子は肉悦を自在に調節していた。なかなか決定的な快楽を与えてくれないまま、徐々に、徐々に、獲物を自分のペースへ引き入れる。

初心者同士の時なら優位に立てた翔一だが、すでに経験を積んでいるらしい先輩が相手では、弄ばれるのみだ。早くも身がわななき、やめてくれと言いにくくなってしまう。

次に冴子は、亀頭の上で唇をすぼめた。口内で少し舌を動かしたら——ポタリ。泡立てた唾を鈴口へ垂らす。

「はうっ!!」

痺れは思いがけないほど強かった。しかも美女の体液は穴に添って亀頭を伝い、裏筋までくすぐっていく。

「は……あ……っ」

少年が物欲しげな視線を落とせば、冴子も颯るように見上げてきていた。

「唾を大事な場所に落とされるのって、ちよつとマゾっぽいでしょ？ ふふん、まだまだしちゃうからね」

彼女はそこでまた下向きになって、ポタリ。ポタリ。その都度ペニスの切っ先で、

心地よさがパッと弾け、もどかしさも尾を引いた。

しかしこんな技、冴子には下ごしらえでしかなかつたらしい。彼女は舌なめずりしてから言い放ったのだ。

「いっただきまあすっ」

そうして首を一層曲げて、直に亀頭を舐めてくる。牡粘膜は唾液でさえ感じてしまうほど滾っていた。赤い軟体のザラつきで擦られるなり、苛烈な疼きが頭の中まで打ち寄せて、

「ふっ！ くああっ!!」

翔一は背中を丸めたまま、わなないてしまう。

「ん……ふあっ……気持ちいい？」

先輩の問いにも、下唇を噛みながら頷くのがやっと。粘っこい質感をグリグリ押し付けられると、気持ち良すぎて涙が出そうだった。

「素直で結構っ。うむうむ、愛いヤツよのう」

満足げに微笑んで、冴子も舌を走らせだす。裏筋寄りから表の丸みにかけて往復したり、先端部分で小さく円を描いたり。何をされても鋭い痺れが亀頭へ刺さり、それが収まる前に次の喜悦を上乗せされる。

「あぷっ……ふっ……おちんちんからヌルヌルしたのが出てきてるわよ……っ。これが翔一君の味なわけね……っ」

確かにペニスからは、我慢汁がこぼれ始めていた。冴子に舐められると、それが粘着質の音を立てる。ペチャペチャ、ヌチャヌチャ、お湯と唾液を啜り取られるより、ずっとみっともない音色だ。

しかもこれ待っていたように、冴子は舌を亀頭へくつつけたまま操るようになった。亀頭の疼きは痛いぐらいなのに、そこから分泌される我慢汁は、愛撫を速めるのに協力。舌戯も縦横無尽に駆け巡った。

「んはっ！ ひや……ま……せうっ……うっ！ さえっ、さっ、冴子さんっ、俺……っ、おかしくなっちゃいますよお！」

脚が滑って、体勢も横に傾いだ。それでも先輩は容赦してくれない。

「まだまだこんなものじゃないのよ、翔一君？」

肌が栗立ちそうな宣告をあっさりすると、形の良い唇を吸盤のようにすぼめる。舌どころか、口全体で吸い付いて。舌でも鈴口を強制的に開き続けた。

「じゅるっ……じゅずず！」

「ふあっ!! あああっ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!